

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号：32203

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23593326

研究課題名(和文) 乳癌・子宮頸癌検診受診率向上をめざした二世帯健康教育プログラムの効果に関する研究

研究課題名(英文) Research on the effect of the two-generation health education program which aimed at abreast cancer and the improvement in acervical cancer medical checkup consultation rate

研究代表者

赤羽 由美 (Akaba, Yumi)

獨協医科大学・看護学部・講師

研究者番号：60593829

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：乳がん・子宮頸がんの好発年齢である母親と保健行動を身につけるのに最適な年齢とされる青年期女性を対象とした二世帯健康教育プログラムを実施した。

プログラムの特徴は「自己効力感を高めて主体的に行動する」と「仲間で支え合うピアサポート」を組み合わせる行動変容をねらうところである。実施後は母親のエンパワーメントが図られ、検診受診の意志が高まった。さらに3ヶ月後も、母親で検診の話をしやすくなったと答えた者が多く、検診受診の意志も継続されていた。このプロセスを今後より多くの場で検討することで、より効果的な健康教育プログラムを実現することが可能であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：We implemented a tow-generation health education program. The subjects were mother who were at asusceptible age for breast cancer and cervical cancer, as well as female adolescents who were at the most suitable age for learning about health behavior. The goal of the program was to create behavioral changes by combining "proactive behavior caused by increasing self-efficacy" with "peer support among friends." After the implementation, the empowerment of the mothers and daughters was attained, and the motivation for medical examinations increased. Moreover, after three months, when asked, many mothers and daughters responded that it had become easier to talk about medical examinations and their motivation to receive medical examinations was intact. We believe that it is possible to implement a more efficient health education program by implementing this process in more places in the future.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学、生涯発達看護学

キーワード：ヘルスプロモーション 乳がん 子宮頸がん 検診率の向上 プログラムの作成 母親二世帯

1. 研究開始当初の背景

がん検診の国際比較をみると、日本の乳がん・子宮頸がん検診受診率は OECD(経済協力開発機構)加盟国 30 カ国の中で最低レベルに位置し、欧米の検診受診率は 70%以上であるのに対し、日本は 20~30%と低いのが現状である。乳がん・子宮頸がん検診を受けることは、女性が自らの健康をより高いレベルにコントロールするための行動であり、ヘルスプロモーションといえる。女性の保健行動は母親の保健行動に影響を受けるとされており、青年期の女性にとって母親の存在は、単なる親子関係のみではなく健康意識に大きな影響を与える存在である。さらに、青年期女性の保健行動は、彼女らが親となった時の次世代の保健行動にも大きな影響を与える。

母娘の乳がん・子宮頸がん検診に関する知識の伝承について、娘から見た調査はみられるが、母と娘の双方を対象とした調査はなく、母親が伝えようと意図したことが娘に伝わっているかどうかは明らかではない。青少年のセルフケア行動を促進するためのアプローチは家族と仲間集団の両方に着目して行わなければならないと言われている。そこで乳がん・子宮頸がんの好発年齢である母親と、保健行動を身につけるのに最適な年齢とされる青年期女性双方への調査を行い、健康教育プログラムの検討を行うことは、乳がん・子宮頸がん検診受診率を向上させるための一助となると考えた。

2. 研究の目的

母娘の乳がん・子宮頸がん検診受診率を向上させるための健康教育プログラムを模索する。

(1)母と娘双方の乳がん・子宮頸がん検診に関するヘルスプロモーション行動についての実態を把握し、健康支援において考慮すべき要因を明らかにする。

(2)二世代を対象とした乳がん・子宮頸がん検診受診率向上のための健康教育プログラ

ムを検討する。

(3)健康教育プログラムを試験的に実施し、効果を評価する。

用語の定義(便宜的な記述について)

女子学生を「娘」、その母親を「母親」、母親の親を「祖母」、女子学生の将来の子どもを「将来の娘」と記述する。

3. 研究の方法

研究1 母娘への質問紙調査

目的:乳がん・子宮頸がん検診について、母親が娘にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。

対象者:A 県内の一般大学等に在籍する女子学生とその母親

期間:2012年1月~5月

方法:女子学生とその母親 1200 組に無記名自記式質問紙調査を実施し郵送法にて回収。

分析:SPSS19.0を使用し有意水準 5%とした。

Mann-Whitney 検定、t 検定、²検定。

研究2 母娘へのインタビュー

目的:乳がん・子宮頸がん検診教育における母親が果たすべき役割についての母娘の思いを明らかにする。

対象者:A 県内の一般大学等に在籍する女子学生とその母親

期間:2012年6月~8月

方法:半構成的インタビュー。主な面接内容は「乳がん・子宮頸がん検診を促進するための母親が果たすべき役割についてどのように考えるか」である。

分析:面接内容を逐語録としカテゴリー化した後、パラダイムとカテゴリー関連図を描き、カテゴリー関連性の検討を行った。(パラダイムは戈木氏の手法である「状況」「行為/相互行為」「帰結」という3つの部分で構成)

研究3 二世代健康教育プログラムの計画・実施とその評価

目的:健康教育プログラムを計画・実施し評

価を行うことで、プログラム開発への示唆を得る。

対象者：18～24歳の女性とその母親

期間：2013年8月～9月

方法：プログラムはHawe, Degeling & Hallのヘルスプロモーションのプログラム開発のプロセスを参照し、研究1と2の結果や先行研究からプログラムを検討した。

本研究は、対照群を設定しない一群の前後比較を行う評価研究である。研究全体として、プログラム直前にPre-Testを実施し、プログラム実施直後にPost-Test、プログラムから3ヶ月後にPost-Testを実施した。

分析：SPSS19.0を使用し有意水準5%とした。

t検定、Wilcoxon検定、Spearman順位相関。

倫理的配慮

獨協医科大学倫理委員会の承認を得て実施。

4. 研究成果

研究 質問紙調査

回収数は、娘190人(15.8%)、母親208人(17.3%)で、有効回答母娘ペア数は131組。

平均年齢は母親49歳、娘19歳。母親の7割が有職者であった。月経記録の記載は、母娘ともに6割であった。

(1) 乳がん・子宮頸がん検診行動

母親の検診を「2年に1回受診」「気が向いたときに受診」者を「受診」群とし、乳がん検診受診群は166名(86.9%)、子宮頸がん検診受診群は162名(81.8%)であった。娘の子宮頸がん検診は「1回以上受けた」「今年、又は20歳になったら受診予定」者を「受診」群としたところ、受診群は22名(12.6%)であった。乳房自己検診は「毎月実施」「時々実施」者を「実施」群としたところ、母親の実施群は127名(64.2%)、娘は14名(8.0%)であった。

(2) 乳がん・子宮頸がん検診の必要性の会話

乳がん・子宮頸がん検診については3割の母娘が、乳房自己検診については2割の母娘がその必要性について会話をしていた。母親

が娘と「話している」と答えている母親の娘も、母親と「話している」と答えている者が多かった(K係数：乳がん検診0.511、乳房自己検診0.423、頸がん検診0.417)。

(3) 乳がん・子宮頸がん検診の会話の理由

母娘ともに会話をもつ理由は「大切なこと」「健康でいたい」「早期発見が重要」で、会話をもたない理由として多かったのは「話すきっかけがない」であった。「話すきっかけがない」と答えている母親の娘も「話すきっかけがない」と答えているものが有意に多く(K係数：乳がん検診0.395、頸がん検診0.394)、「お互いに健康でいたい」と答えている母親の娘も同様だった(K係数：乳がん検診0.407、頸がん検診0.348)。

(4) 乳がん・子宮頸がん検診のきっかけ

母親の乳がん・子宮頸がん検診「受診」群にそのきっかけを複数回答で尋ねると、「検診の手紙(乳がん：47.3%、頸がん：50.0%)」、「職場の検診(乳がん：27.7%、頸がん：30.2%)」が最も多かった。娘は乳房自己検診は「テレビ(64.3%)」が最も多く、次に「母親(21.4%)」で、子宮頸がん検診は「母親(22.7%)」が多かった。

(5) 乳がん・子宮頸がん検診に対する態度

乳がん検診について「乳がんになると思うと不安」(P=0.043)、「費用が負担」(P=0.045)、「乳房自己検診では正常と異常の区別がつかない」(P=0.036)の3項目に有意差があり、「思う」と答えている母親の娘も「思う」と答えているものが多かった。

子宮頸がん検診については「子宮頸がんになる可能性がある」(P=0.032)、「検診を受けることを他人に知られたくない」(P=0.012)、「がんが見つかるのが心配」(P=0.025)、「面倒」(P=0.008)、「恥ずかしい」(P=0.002)、「費用が負担」(P=0.042)の6項目に有意差があり、「思う」と答えている母親の娘も「思う」と答えている者が多かった。

(6) 母娘の検診行動の関連

母親の乳房自己検診「実施」群と「未実施」

群では、実施している母親の娘も実施している者が多く ($P=0.007$)、月経記録の記載も同様であった ($P=0.007$)。しかし、子宮頸がん検診に関しては関連はみられなかった。

(7) 検診行動と検診の必要性の会話

母親の乳がん・子宮頸がん検診「受診」群と「未受診」群では受診群の方が、乳がん検診 ($P=0.037$)・子宮頸がん検診 ($P=0.028$) について娘と話している者が多かった。また、乳房自己検診「実施」群と「未実施」群でも受診群の方が、乳がん検診 ($P=0.020$)・乳房自己検診 ($P=0.001$) について娘と話している者が多かった。

娘の子宮頸がん検診「受診」群と「未受診」群では受診群の方が、子宮頸がん検診について母親と話している者が多かった ($P=0.023$)。また、乳房自己検診「実施」群と「未実施」群でも実施群の方が、乳がん検診について母親と話している者が多かった ($P=0.001$)。

(8) 子宮頸がん検診行動と子宮頸がん知識

母親の子宮頸がん検診「受診」群と「未受診」群では「受診」群の方が、子宮頸がんに関する知識を持っていた ($P=0.001$)。

娘の子宮頸がん検診「受診」群と「未受診」群では「受診」群の方が、子宮頸がん検診に関する知識を持っていた ($P=0.001$)。

(9) 乳がん検診行動と乳がん知識

母親の乳がん検診「受診」群と「未受診」群では「受診」群の方が、乳がんに関する知識を持っていた ($P=0.013$)。また、母親の乳房自己検診「実施」群と「未実施」群では「実施」群の方が、乳がんに関する知識を持っていた ($P=0.001$)。

娘の乳房自己検診「実施」群と「未実施」群では「実施」群の方が、乳がんに関する知識を持っていた ($P=0.028$)。

(10) 祖母から母親への検診の必要性についての伝承と母親から娘への伝承

祖母から伝承された母親「伝承」群と「非伝承」群では「伝承群」の方が、伝承された検

診について娘と話している者が多かった (乳がん検診 $P=0.001$ 、乳房自己検診 $P=0.002$ 、子宮頸がん検診 $P=0.004$)。

(11) 母娘の関係と検診の必要性の会話

母親が思う母娘との関係について「仲の良い友達のような関係」「どちらかといえば友達のような関係」と回答があったものを「友達関係」群、「どちらかといえば上下関係」「厳しい上下関係」と回答があったものを「上下関係」群としたところ、「友達関係」群は 130 名 (65.7%)、「上下関係」群は 47 名 (23.7%) であった。「友達関係」群と「上下関係」群では「友達関係」群の方が、検診に関して娘と話していたものが多かった (乳がん検診 $P=0.012$ 、乳房自己検診 $P=0.005$ 、子宮頸がん検診 $P=0.038$)。

娘が思う母娘との関係について三砂氏の母娘関係尺度を構成する 4 因子 (親密・受容・支配・服従) の得点でみると、「親密」「受容」といった肯定的な母娘関係を示す 2 因子については、「子宮頸がん検診の必要性に関する会話 (親密 $P=0.015$ 、受容 $P=0.032$)」と「性・異性についての会話 (親密 $P=0.002$ 、受容 $P=0.044$)」の 2 項目において、母親と「話す」群の方が「話さない」群より、因子得点は高いという関連が認められた。「支配」「服従」といった否定的な母娘関係を示す 2 つの因子に関連は認められなかった。

研究 2 母娘へのインタビュー

(1) 母親の思い

母親の分析から 34 個のサブカテゴリ、さらに 12 個のカテゴリーを得た。カテゴリーの関連から 2 つの現象を抽出した。カテゴリーを『 』で示す。

現象 1: 娘が検診の意識を高めるためのモデルとなる母親の行動

『母親からの検診に関する知識の伝承』として、伝承があった場合となかった場合があった。また『検診教育は母親の役割と認識』

し、『娘が検診を受けるためのきっかけづくり』『検診の必要性和受診時の娘の心身への配慮と葛藤』という状況があった。受診のきっかけづくりから『娘が検診の意識を高めるためのモデルとなる母親の行動』、母親からの知識の伝承は『娘への知識の伝承』という行為となった。受診時の娘への配慮は『検診体制への要望』、モデルとなる母親の行動は『家庭での性・検診教育の必要性和実施の困難と問題』、娘への知識の伝承は『娘に伝授するための知識の必要性』という帰結となった。

現象 2：学校での性教育に引き続き、家庭での検診教育の必要性

『性・検診教育に関する学校と家庭の連続性のなさ』という状況から、『学校での性教育に引き続き、家庭での検診教育の必要性』という行為となり、『性や検診について家族が情報を共有できる環境調整の必要性の認識』という帰結となった。

母親は自分の経験からきっかけの必要性を認識しモデルとなる行動を取っていた。反面、母親自身の羞恥心や娘の心身に及ぼす影響への不安が、娘の受診行動に歯止めをかける状況も確認された。母親は家庭での検診教育の困難感を持ちながらも娘に伝承する必要性を感じ、環境調整やそのための知識を得たいと思っていた。

(2)娘の思い

娘の分析から 35 個のサブカテゴリ を得て、さらに 12 個のカテゴリを得た。カテゴリの関連から 2 つの現象を抽出した。

現象 1：乳がん・子宮がん検診や研修を母親(友人)と一緒に受けてたい

『検診教育は母親の役割と認識』し、母親に勧められている場合もあった。また、がんへの心配があり検診を受けたい気持ちはあるがきっかけのなさや羞恥心等により『検診を受けたい気持ちはあるが受診の困難』という状況があった。受診の困難を抱えながらも

母親の勧めにより『母親の検診への関心』をもち、『検診や研修を母親(友人)と一緒に受けてたい』という行為となった。母親の検診への関心から『娘ができたなら伝えたい』、受診の困難よりもがんへの心配や検診の必要性の優先により『検診・ワクチンの実施』、困難が解決されない状況が『検診・ワクチンの未実施』という帰結となった。

現象 2：性・検診教育は母親より専門家から受けてたい

『学校で受けてきた性教育の肯定』と『母親との話しやすい関係』という状況があった。母親との話しやすい関係があるがこれまで受けてきた学校での性教育を肯定し、『性・検診教育は母親より専門家から受けてたい』という行為となり、『検診やワクチンについて知る機会が欲しい』という帰結となった。

検診教育は母親の役割と認識し、娘ができたなら伝えたいと思っている。また、母親のサポートがあれば存在する困難を乗り越え、検診を受けたいと思っていることが確認された。知識の獲得は専門家から受けてたいと思っており、母娘で参加する検診教育プログラムを構築し支援していくことで、若年女性だけでなく中高年層の乳がん・子宮頸がん予防への支援となると考える。

研究 3 試験的な二世世代健康教育プログラムの計画・実施とその評価

研究 1 と 2 から、娘と母親の関係において、乳がん・子宮頸がん検診に関して、母親が娘と向き合い、娘を気にかけて、娘にとって話しやすい相手であることが重要であるとの示唆を得た。そこで母娘で、乳がん・子宮頸がん検診についてともに考える時間を持ち、乳房や子宮を改めて意識する機会を持つことは、意味のあることではないかと考えた。

そこでプログラムを「自己効力感を高めて主体的に行動する」と「仲間(母娘)で支え合うピアサポート」を組み合わせる計画し、行

動変容をねらった。

対象者は20組で、平均年齢は娘20.15歳、母親49.80歳であった。娘の子宮頸がん検診受診者は3名(15.0%)、母親の受診者は11名(55.0%)、娘の乳房自己検診毎月実施者はおらず母親は1名(5.0%)で、乳がん検診受診者は15名(75.0%)であった。受講前に子宮頸がん検診の会話をしていた母娘は3割で、乳がん検診は2割程度であった。受講後、母娘の自尊感情(母 $P=0.001$ 、娘 $P<0.0001$)と一般性セルフエフィカシィ得点(母 $P=0.006$ 、娘 $P=0.001$)は有意に上昇し、フェイススケール(母 $P<0.0001$ 、娘 $P=0.003$)も有意に幸せ顔に変化した。プログラムには全員が満足したと答え、その理由として娘は「母親とゆっくり話す機会は滅多にないから楽しかった」等で、母親は「娘と向き合う機会となった」等であった。「今後は母娘で検診について話せるか」「検診受診の意志は高まったか」の問いには、母親は全員「そう思う」と答えたが、娘2名は「まだ子宮頸がん検診に抵抗がある。話しやすくなった気はする」と答えた。娘の子宮頸がん検診・乳房自己検診実施の意志と母娘の会話状況(頸がん $P=0.001$ 、乳房自己検診 $P=0.002$)、母親に対する理解度(頸がん $P<0.0001$ 、乳房自己検診 $P<0.0001$)、乳がんビデオの理解度(乳房自己検診 $P=0.004$)、子宮頸がんビデオの理解度(頸がん $P<0.0001$)、子宮頸がん検診への関心(頸がん $P<0.0001$)、乳がん検診への関心(乳房自己検診 $P=0.020$)には関連性が認められた。母親の頸がん・乳がん検診受診の意志と母娘の会話状況(頸がん $P=0.002$ 、乳がん検診 $P=0.022$)、娘に対する理解度(頸がん $P=0.012$ 、乳がん検診 $P=0.031$)にも関連性が認められた。3ヶ月後の調査では、母娘で検診について話しやすくなり今後は定期的に受診したいと答えており、実際に受診した母娘もいた。本教育プログラムへの参加により母娘でエンパワーメントが図られ、検診についての会話が持てるよう

になり、検診受診への意志が高まった。

総括：二世世代健康教育プログラムの重要性

青年期は、女性のリプロダクティブヘルスの維持向上のための生活習慣を確立するうえで重要な時期である。その時期に、母親と娘が検診に関する会話をもつきっかけとなるような支援があれば、互いの健康に目を向け、リプロダクティブヘルスの維持向上につながると思う。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 5 件)

- 赤羽由美、湯本敦子、和田佳子、今泉玲子、家庭での乳がん・子宮頸がん検診教育における母親が果たすべき役割(第1報)-母親の思い-、第28回日本助産学会学術集会、2014年3月22~23日、長崎。
- 赤羽由美、湯本敦子、和田佳子、今泉玲子、家庭での乳がん・子宮頸がん検診教育における母親が果たすべき役割(第2報)-娘の思い-、第28回日本助産学会学術集会、2014年3月22~23日、長崎。
- 赤羽由美、湯本敦子、和田佳子、今泉玲子、母親と娘の乳がん・子宮頸がん検診に関する認識と母娘関係(第1報)、第54回日本母性衛生学会学術集会、2013年10月4~5日、大宮。
- 赤羽由美、湯本敦子、和田佳子、今泉玲子、母親と娘の乳がん・子宮頸がん検診に関する認識と母娘関係(第2報)、第54回日本母性衛生学会学術集会、2013年10月4~5日、大宮。
- 赤羽由美、湯本敦子、和田佳子、今泉玲子、母親と娘の乳がん・子宮頸がん検診に関する認識と母娘関係(第3報)、第54回日本母性衛生学会学術集会、2013年10月4~5日、大宮。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤羽由美 (AKABA YUMI)
獨協医科大学・看護学部・講師
研究者番号：60593829

(2) 研究分担者

湯本敦子 (YUMOTO ATUKO)
獨協医科大学・看護学部・教授
研究者番号：10252115

和田佳子 (WADA KEIKO)
共立女子大学・看護学部・准教授
研究者番号：50293478

今泉玲子 (IMAZUMI REIKO)
獨協医科大学・看護学部・講師
研究者番号：70389097